獣の慟哭

カンカン、と樫の古い扉をノックする音が響いた。
一度では間に合わなかった神父の手がノブにかかる寸前、再び急かすようにカンカン、とノッカーの忙しない金属音が無人の教会の中にこだまする。
日曜日のミサに向けての準備をしていた黒いカソックを纏う神父が慌てて扉を開けた先には、さらに黒いコートを着た偉丈夫が立っており、昨晩からゆるく降り注ぐ雨にコートはすっかり冷え、色を更に濃く変えている。
灯り一つない暗闇に炎のような赤く硬い髪が抜き出されたようで、その下に続く翠色の双眸はどこか虚ろに光っていた。
「クラウス」
「……夜分遅く、済まない。スティーブン」
「一体どうしたんだ。今日は招集もなかっただろう」
「……ゆるしの、秘蹟を……行ってほしくて来た……」
「懺悔のことかい?そりゃあ構わないが……今日はもう、遅いからゆっくり休んでから来ればいい」
神父にクラウスと呼ばれた赤毛の大男は太い首を小さく左右に振る。
今日でなくてはいけない。
クラウスは何か思いつめた表情でそういった。
スティーブンと呼ばれた神父は、黒く艶のある髪をガリガリと掻き毟ると、一度言ったら梃子でも動かない親友のことをまずは優先することにした。
古いが手入れが行き届いている聖堂を汚されるわけにもいかず、スティーブンはクラウスにコートを脱いでタオルを使えと投げてやる。クラウスは無言でそれに諾々と従い、ヴィキューナの滑らかな手触りのするコートをスティーブンの指し示すコートかけにかけた。
そして、ひどくこわごわとした様子で内ポケットに入っていた本を取り出し、クラウスはそれを胸に押しいただく。革張りであろうか、本の大きさからいって聖書かもしれない。スティーブンはそう考えると、敬虔な信徒であるクラウスらしい、と告解室の鍵を取り出した。
雨だれの音が聖堂内に間断なく響き渡る。気分が重苦しく沈み込み、憂鬱になるような雨がここのところずっと続いていた。
告解室の小部屋を開くと、クラウスをなかへ招き入れる。雨が降り続いているせいなのか、それとも――ここが罪を吐き出す場所であるせいか、頬を撫でる空気は背が震えるほどひやりとしていた。
中には小さな丸椅子が一つ置かれているだけで、あとは何もなかったが、大柄なクラウスが座るだけで狭い空間がさらにみっちりと隙間なく埋まってしまう気さえした。

部屋は二つに板で区切られており、衝立の部分は幾何学模様の透かし彫りが入れられ、間には細かい金網が張ってある。反対側の区切られた空間に入ると、衝立の部分から少し張り出した肘おきに手をおいて、クラウスを見た。

「――きみは、懺悔をするのは初めてだったな」

衝立の向こう、暗く金網を隔てることで相手の表情から一切見えなくなる小部屋の中、スティーブンはクラウスにそう呼びかけた。

クラウスは敬虔なカトリック信徒でありながら、決して神の前でその身を委ねようとはしない男であった。

神の秘蹟を信じてはいない。若い頃、クラウスがそう嘯いているのを聞いたこともある。カトリック信者にも理詰めで神を解明しようというものは居るというのはスティーブンも耳にしたことはあったが、その中でもクラウスの頑固さは筋金入りであった。

だが、スティーブンも神を全てを信じているわけではなかった。

ただ、己の仮の姿としてこの聖職というのが一番性にあっていただけだから、続けているだけだ。

スティーブンは己の左頬に大きく斜めに走る古傷に拳をあて肘をつくと、親友という気安さからかいつもよりも大分くだけた口調でクラウスの懺悔を促す。

「きみも知っている通り、この部屋で行われた懺悔の内容は一切外に漏らされることは無い。僕と、きみと――全ての父なる神だけがそれを知るのだ」

「ああ、わかっている。だからこそ――私はここに来た」

クラウスは息を大きく吸って、吐いた。

彼の言葉でここに来たたった一つの理由がよく理解できた。いち聖職者としてではなく、クラウス・V・ラインヘルツのただ一人の心許せる者として、自分――スティーブン・A・スターフェイズは選ばれたのだろうと。

「きみがそれほどまでに苦しみ、吐き出さなければならない懺悔とは一体なんだ、クラウス」

スティーブンがそう言った時、部屋のなかに隙間風が僅かに吹き込んできた。クラウス側から湿った空気が衝立の透かし彫りを通して流れ込んでくる。そのこもった湿り気の中に、嗅ぎ慣れた匂いがまじり、スティーブンの鼻孔をくすぐる。

鉄錆に似た生臭い匂い。鮮血が乾き始めた匂いがした。

「クラウス、怪我を――」

「もう止まっている。かすり傷だ」

「だが」

「……私の為を思うなら、そのまま動かずに懺悔を聞いてほしい。懺悔、ではないかもしれないが。私にも、よくわからないのだ」

クラウスはそう言って一度天を仰ぐ。はあ、と常人よりも大きい胸郭に濡れた空気を満たし、それを吐き切るように長いため息をついた。

「――レオナルドを、覚えているだろうか。きみの孤児院にいたレオナルド・ウォッチだ。妹と一緒にいただろう」

「もちろん。脚の悪いミシェーラを、彼女の結婚までよく世話していたと思う。ここを出てからだいぶ長いこと顔を見ていない気がするけれどもね。で、そのレオナルドがどうかしたのかい？」

「……私が、ころした……」

スティーブンはその言葉の意味がにわかには信じられなかった――私が殺した、とクラウスは確かに口にしたけれども、彼とレオナルドの接点がわからない。

いったい、なぜ。

クラウスはその問いに答える間もなく閉じた唇の間から小さな嗚咽を漏らし始める。

「レオナルドは……私の全てだった……！私の、愛情を全部受け止めてくれたのに……あの子の首を、この、手が」

クラウスの両手がレオナルドの細い首を象るように指を輪にして絞る動きを見せた。スティーブンの耳にありえない音が聞こえる。

レオナルドの気管の締りゆく音、みしみしと音を立てるクラウスの筋肉、喉が完全に絞められ、意識をゆっくりと喪っていくレオナルドの最後の呼吸音。クラウスの手がレオナルドの首の骨を折る、ごきり、という嫌な音。

――この手が。私のこの両手がレオナルドの絞めた首を手で再現していく。

クラウスは泣きながらレオナルドの命を終わらせた。

スティーブンの記憶の中のレオナルドは細くあどけない印象の強い少年だった。母親譲りだという黒髪の癖毛はいつもどこかはねていて、妹のミシェーラのようなするりと指からこぼれ落ちる直毛が羨ましいといいながら、彼女の髪の毛を結っていた兄。

彼らと過ごしたのはほんの数年間だが、スティーブンが管理をしていた孤児院の最後の子供だったこともあり、二人の記憶は鮮やかにまだ焼き付いているのに。

二人はよくこの教会の掃除も手伝ってくれた。他に身寄りのない二人はスティーブンにとってもその時は唯一の家族だった。

クラウスが二人を知ったのもその頃である。

顔が厳つく壁のようである彼の威風堂々とした佇まいに、最初は少し怯えてスティーブンの後ろから出てこなかったレオナルドも、すぐにクラウスを慕うようになった。

――ミスタ・クラウス。コートを貸してください。僕がかけておきます。

まるで彼の小間使いであるかのような振る舞いだったが、レオナルドはクラウスが来ると嬉々としてそのそばへ走り寄っていった。彼へ長年仕えている執事も微笑ましくその光景を見守っており、この教会へ来るときはそっと席を外すのが常であった。

両親を不慮の事故で失った十歳を過ぎたばかりの子供が、将来の夢をクラウスに見るのはわかるような気がする。公爵家の出身であるクラウスは立ち居振る舞いに気品が感じられる。そして二人への眼差しは、いつも慈愛に満ちていたものだったからだ。

クラウスは積極的にこの教会と孤児院に寄付をしてくれた。そればかりか、自分の同業者にもそれとなく寄付を勧め、二人が不自由なくハイスクールまで卒業するのを見守ってくれたのだ。

二人にとってもクラウスは家族であった。

レオナルドの妹、ミシェーラ・ウォッチが通っていた福祉就業支援施設のイベントで、ある会社主催のパンの即売会に行った時のことだったろうか。

ミシェーラはある人物に見初められ、数ヶ月の交際を経てとんとん拍子に縁談が決まった時も、クラウスは自分の家族のように喜んでいたのに。

結婚式にも遠巻きではあるが参列し、スティーブンとともに自分たちのかけがえのない家族である、と新郎であるトビー・マクラクラン氏に照れながら紹介された日が昨日のように思い出せる。

それくらい、クラウスとウォッチ兄妹は良好な関係であったのだ。

その後ミシェーラが嫁いだことでレオナルドも孤児院にいる意義を失い、スティーブンの元から巣立っていった。

もともと孤児院には年齢制限がある。ミシェーラよりも先にハイスクールを卒業した時点でレオナルドは自立しなければならなかったのだが、足が不自由な妹のためにと、スティーブンもレオナルドが孤児院にとどまるのを特別措置として許可していたのだ。

自立したレオナルドも最初はよく手紙をくれていたのだが、ここ二三年は忙しいのだろうかそれも途絶えており、少々心配をしていた矢先のこの告白である。

スティーブンの頭の中は疑問符とレオナルドの面影とがぐちゃぐちゃに混じり合い、二の句を継ぐことができない。

「レオナルドは、一体どんな生活をしていたんだ」
「……最後の半年は、私のそばに居てくれた。優しい子だから私を見捨てられなかったのだろう」
「では、きみはレオナルドとどこで再会したんだ」
「――『マリアの家』というのを知っているかね、スティーブン」

クラウスが口にした言葉に、確か、とスティーブンの記憶が遡っていく。それほど前に聞いたことではなく、わりと最近その名を見た気がした。報告書の中で、だったような。

スティーブンは記憶の片隅で眠っていた『黄金の天秤』の紋章が捺された報告書を思い出す。

――そうだ、確か『ライブラ』の任務報告書の中で見たのだ。

スティーブンとクラウスは『牙狩り』という吸血鬼殲滅のための超常秘密結社に籍を置いている者たちだ。

そのなかでも黄道十二宮の一つである、正義と公平を司る女神が持つ天秤を戴いた『ライブラ』という下部組織のリーダーでもある。

かつてニューヨークだった今の街は、十数年前のある日、一晩でこの世ならざる場所と人界が複雑怪奇に絡みあい、混じり合う場所になった。

すると、たちまち世界中の爪弾きものたちが一斉に元ニューヨーク――現在はヘルサレムズ・ロットと呼ばれている――に集結し、悪徳の限りを尽くしだす。

ヘルサレムズ・ロットで起こるあらゆる出来事が外の世界にほんの少しでも漏れると世界が傾きかねない。この街は、そうした薄氷の上に成り立っているようなものだ。

クラウスたち『ライブラ』はそうした混沌の街の中で世界の均衡を保つために暗躍する秘密結社である。

ライブラの構成員の多くは一般社会に溶け込むために別の生業を持っているが、クラウスとスティーブンも例外ではなかった。

スティーブンは小さなカトリック教会の神父、クラウスはある貿易会社の取締役という肩書を持っている。

そんな二人だから、地下に潜ったあらゆる裏の世界にも詳しい。

警察やマフィア、魔道科学者たちの集まりなど、虚虚実実とした者たちが常にライブラには関わっている。

そのなかで『マリアの家』とは、スティーブンの記憶の中でも一風変わった場所であったと記憶していた――人類や異界人の未成年者を集めての売春宿であったという記述だったような。

「小児性愛者向けの売春宿だったはずだね。きみが内偵した。そうだろう？クラウス」

「――そう。私は確かにそこへ行った。内偵とは言うものの、個人的な伝手を使っての潜入だったから、私情と言われてもしょうがないところではある。しかし、私は見つけたのだ」

「個人的な伝手？」

「……私も、そういう質なのだよ。だが私は誰でもいいわけではない。そういう場所に足を踏み入れることはあっても抱かずに帰ってくることがほとんどだ。けれど――あの日は違った」

「そこでレオナルドに会った、そうなんだな？それも、体を売る方で」

クラウスはスティーブンの言葉に無言を貫いた。沈黙は時として雄弁に肯定を表す。暗く淀んだ空気が重く立ち込めるなか、スティーブンはこれが幻であったら良いのに、とさえ考えていた。

＊＊＊

クラウスが『マリアの家』に足を踏み入れることになったのは、決して偶然ではなかった。

内偵調査であればライブラに出向というかたちで所属している人狼族のチェイン・皇という女性がいる。存在を希薄にし、どこにでも侵入できるという彼女の特性を活かして調査をさせることなど容易いものであったからだ。

――しかし、クラウスは自らそこへ赴いた。

クラウスがライブラという秘密結社の長であることは裏社会には広く知れ渡っている暗黙の事実である。

顔や体格まで詳細にではないだろうが、『マリアの家』の関係者にも薄々彼が来ることは知られているはずであった。

そんな危険を侵してまで地下の売春組織に赴いた彼には、ひとつの思惑があった。

クラウスは長年心にある『少年』を住まわせていた。

それはある意味で彼にとっての崇拝すべき存在であり、神よりも優先されるべきものであった。

彼の小児性愛は今に始まったことではなく、自分とその心のなかの『少年』の歳が離れていくにつれ、その気持ちは大きくなっていった。クラウスの場合は小児性愛というよりも、『少年』を偶像化して愛し、生身の器足り得るものを探すものに近い。

生家の裏の生業であるこの牙狩りに所属した時も、ライブラという秘密結社を立ち上げその長に祀り上げられた時も、クラウスのなかの『少年』はずっと彼とともにあった。

幼い頃より利発で体格にも恵まれたクラウスだったが、生まれ持った身分の差が災いしてか、なかなか心許せる友人というものができなかった。

ひとり広い屋敷で泣くクラウスに、母親がひとつの提案をする。

心の中に自分の『友人』を作りなさい、と。

何が良くて何が悪いのか、親に言えないこともその『友人』になら打ち明けられるようになれば、引っ込み思案なクラウスも少しづつ他人と心を通わせることができるようになるだろう。

母親はそう考えていたのだったが、クラウスの『友人』はいつしか『恋人』になり、『すべてを受け入れてくれるもの』になっていった。

幼いころ何度も読み返した聖書のなかに出てくる天使をクラウスは心の友とし、理想とする姿を思い描く。

――すらりと伸びた手足、金色のウェーブが掛かった髪の毛、サファイアを嵌め込んだような美しい青い目、薔薇色に色づきふっくらとした頬。

クラウスの理想とする天使は、レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた岩窟の聖母の中の大天使ウリエルであった。

自分のなかに作り上げた友を天使と同じ名で呼ぶのは流石に気が引けたクラウスは、彼を『レオナルド』と名付けた。

レオナルドはいつでもクラウスの心の中で微笑み、ふっくらとした柔らかな掌でクラウスの頬を撫でる。目を閉じ、その手の動きを追うクラウスは、だんだんと彼に触れられた部分が熱く、硬く、そして欲望に満ち溢れてくる事に気づいた。

――レオナルド、私の天使。私のすべて。

心の中でのレオナルドは、クラウスのすべてを受け入れてくれた。成長するにつれだんだんと恐ろしげな面構えになる自分の風貌すら、彼は愛おしそうに白い指で慰撫するのだ。

だが、そんなレオナルドは自分にじかに触れられない。当たり前のことだ。すべてはクラウスの想像の産物なのだから。

そこでクラウスはレオナルドと同じ年頃の少年に触れてもらうことで肉体的な充足を得ようとした。

目を閉じ、まぶたの裏にレオナルドを描く。他の人間を通してではあるが生身の肉体を授かったレオナルドとの交合は、クラウスに今までに感じたことのないほどの充足感を与えてくれたのだ。

けれどもこの禁断の果実を一度味わってしまったことで、クラウスは想像の中のレオナルドと自らの自慰では物足りなさをだんだん味わうようになっていく。

――あの息もできないような、脳をすべて灼き尽くすほどの快感と充足を得たい。

いつしかそう考えるようになったクラウスは、自然とそういう売春宿へ足を向け始め、頻繁にではないが回数を重ねるようになっていった。

だが、目を閉じたままとはいえ、心の中にはっきりと思い描くことのできるレオナルドと、目の前にいる痩せて女性ものの下着を無理矢理つけさせられているような子供ではクラウスの中で齟齬が生まれて来るのはどうしようもない事実であった。

しかし一度味わってしまったあの夜のことを忘れられず、クラウスはレオナルドの容姿に近い少年をひそかに探し求めていた――誰にも、心のなかのレオナルドにも言えないままで。

クラウスが『マリアの家』に出向いたのは、そのような経緯があってこそである。

表向きはライブラの内偵調査だが、紹介者とともにフロアに通され、人種の枠を超えた様々な少年や少女が入れ替わり立ち代わり自らを捕食する大人に品定めをさせるなか、クラウスはある少年に目をつけた。

『マリアの家』では誰もが仮面をつけ、一見して人相の判別がつかないようにしていた。その中でひときわクラウスの目を引いたのは、金髪でゆるい巻毛をした、顔の半分以上を簡素な仮面が覆う少年だった。

肌の色も健康的だがやや白く、仮面のなかに嵌め込まれた青い玉が、彼のなかにいるレオナルドを彷彿とさせたためだ。

クラウスは彼がそばに来た時に軽く手に触れ、そのまま自分の腕のなかへと少年を引き入れた。

フロアでは性的なスキンシップは禁じられているし、少年を怖がらせないように慎重にことを進めなければいけなかった。

しかしクラウスの特徴的な直毛の赤毛は仮面につけられた豊かな黒い鳥の羽に隠れていたし、照明を落として僅かな光のみになったフロアでは、コートをまとったクラウスは闇に溶け込み、いつもは人を萎縮させるだけの相貌や体格といったコンプレックスがなくなり、身分や目的をひとときの傍らにおいてひとりの獣性を剥き出しにした男として振る舞うことができたのだ。

――きみがほしい。

腕の中で震える小さな身体にそう囁きかけると、少年はこくりと小さく頷いた。この売春施設を訪れる客の多くは少女を好むが、クラウスのように少年を求めるものも少なくない。

クラウスは少年に導かれるまま小部屋へと向かう。部屋のなかへ足を進めると、先程まで見知らぬ誰かがこの部屋で睦事に興じていたのだろうか、まだ拭いきれない肉欲の残滓がむわ、と彼の鼻をついた。

予想以上の淫靡な匂いに思わず眉をしかめながら目をやると、流石にベッドやテーブルなどは綺麗に片付けられていたが、クラウスは今日ここで少年を抱くつもりはなかった。

――ほんの少し、仮面の下の素顔が見たい。

仮面をつけたまま、薄く下の肉体を透けさせるローブを肌から滑り落とす少年を、カウチソファに深く腰掛けながら眺めていると、扇情的な下着を身につけた少年がクラウスの膝へと乗ってきた。

少年の白い指がクラウスの着ているコートの釦を外し、ダークブラウンのスリーピース・スーツを薄明かりの下に曝け出す。

そこでクラウスは、少年の手を掬い上げるように取ると、その細い指先に唇をつけたまま言った。

「……これで二人きりだ、きみのその仮面をほんの少しだけとってはもらえないだろうか？」

少年はクラウスの言葉に身を僅かに硬くした。

――ルール違反にでもなるのだったろうか？クラウスが首を傾げていると、震える声がこう言った。

「それはできません、ミスタ・クラウス」

その声には聞き覚えがあった。忘れるわけがない。

あの小さな教会で、自分の後ろを嬉しそうについてきた少年――レオナルド・ウォッチの声だ。

クラウスは息を詰めながら少年の仮面を乱暴にはぎ取る。

少年は、クラウスの記憶からすっぽりと抜け出たようでもあったが、稚さを残すその顔だちには少しだけ成長したあとがあった。

「――レオナルド」

「どうして、ここに来たんですか、クラウスさん」

「私は……」

「今ならまだ何もしていないし、見ていないで済ますことができる。クラウスさん、帰って下さい。そして、僕のことは忘れて下さい――今日、ここに招かれざる客が来ているのです」

「招かれざる客とは？」

「僕も詳しくは聞いていません。ですが、彼らはこう言った裏の稼業をすべて潰して回っている秘密結社だと聞きました。世界の均衡を保つために、この街の暗部を消している組織の人間がここに来ると。あなたはそんな人に関わってはいけないんですよ」

クラウスはその話をレオナルドの口から聞くと、なるほど自分が来ることは伝わってはいたが、人相やそういった詳しい情報は漏れてはいないということがわかり、ふふっ、と思わず小さな笑い声を漏らしてしまった。

「なにがおかしいんですか」

「関わるもなにも、我々は警察ではない。誤った情報が錯綜しているようだが別段きみの店に危害を加える気は毛頭ないし、そういった噂が広まっているとなればきみをこの店に置いておくわけには行かなくなった」

「――クラウス、さん？」

「その招かれざる客の組織の名は『ライブラ』という。なに、私たちは少々荒事に長けているだけの非公式組織だ。そもそもそういう管轄は警察の仕事だからね」

クラウスはそういうと、裸に近いレオナルドにローブを着せ、自らのコートをさらに羽織らせる。

そして呆気に取られ微動だにできないでいるレオナルドをひょいと軽く抱きかかえ、大柄な彼には狭すぎる部屋を大股で去っていった。

その後クラウスは『マリアの家』を取り仕切る異界人のマフィアと話をつけ（金をそれなりに払ったものの、一番は店にある少年少女たちを言いなりにするためのドラッグをすべてクラウスがその場で破壊してきたことも大きい）レオナルドを解雇させてきた。

レオナルドは入って間もなく、まだ店側に借金が多くあったためドラッグでの縛りは必要ないと判断されていたのだろう。

不幸中の幸いと言えるのかどうかもわからないが、彼を引き取ってから何食わぬ顔で警察の強制捜査の手引きをし、レオナルドが検査入院させられている病院にクラウスはギルベルトと訪れると、きみはもう自由の身だ、と告げた。

「スティーブンに連絡するかね？孤児院は彼一人では運営が難しいから閉めてしまったが、きみが戻れば再開できるだろうと思う。もちろん、もうきみは成人しているから院で働く側になるだろうが」

「……スティーブン先生には言わないでおいてもらえませんか。戻りたくないというわけではないんですけど、まだこのことを自分で説明することができないんです」
「わかった。なら、スティーブンのところに戻るのはきみに自由にすればいい。それとレオナルド、ひとつ聞いてもいいかな」
「はい」
「きみはあの店には自ら飛び込んだのかね」
「――はい。人づてではありましたが。ぎりぎり年齢で言えば成人してますけど、僕、見た目がちょっと幼く見えるらしくて。それでなんとか」
「そうか」
「クラウスさんが僕に使ってくれたお金は働いてお返しします。何年かかっても、必ず」
「……ミシェーラ嬢は、知っているのか？」
「クラウスさん、ひとつって仰ったじゃないですか」
「そうだったね」
「……えと、あと二三日で何事もなければ退院出来るそうで。すみません、ありがとうございます。今は、これしか言えませんけど」
「――気にしなくていい。きみもミシェーラ嬢も私の家族のようなものだ。甘えてくれて構わない」

クラウスはそう言うと、立ち上がりながらレオナルドの頭に自らの大きく無骨な手を置いた。
ともすればすっぽりと掌の中にすっぽりと収まってしまいそうなほどの小さな彼の頭に、ついさっきまで見ていた仮面の髪の毛が重なりあうと、不意に、どく、と身体の芯から血の滾る音がした。
――レオナルドは、似ていないじゃないか。
クラウスは目を細めてレオナルドを見る。
あの店の中で見た彼はどうしてあんなに艶めかしく見えたのだろうか。そう独りごちるクラウスだったが、白いベッドの中で戸惑いながらこちらを見上げてくるレオナルドを自らの腕越しに見やると、子供扱いをしてすまない、と言いながら手を戻した。
自分の欲望をレオナルドに重ねてしまったことで、いたたまれなくなったクラウスが無言のままくるりと背を向けた時、彼の有能な執事であるギルベルトがそろそろお時間です、と声をかけてくる。
レオナルドの視線はうろうろと病室とクラウスをさまよい、何を言うべきなのかもよくわかっていないようだ。
それを良い事に、クラウスはギルベルトとともに小さな個室の扉を閉めた。

「――よろしかったのですか」

「何がだね？」

「どうしてレオナルドさまがあの店にいながら無事でいられたのか、お聞きするべきではなかったのでしょうか」

日没の赤い残光が突き当たりの大きな四角い窓から入り込み、真っ白に塗られた壁や床が一瞬、燃え上がるような炎の色に染まっていく。

レオナルドの病室の前に立つクラウスとギルベルトも例外なくその色に染まり、クラウスのまとう黒一色のコートはなまめかしいブラウンの色味にその姿を変えていった。

「……ミシェーラ嬢のことかね」

「大変差し出がましいこととは思いましたが、坊っちゃまが家族のように大切に付き添われてきた方の願いですので、お調べせずには居れませんでした」

「だが、起きたのは『外』でのことだ。私が『ライブラ』として介入できるのはこのヘルサレムズ・ロットの中で起きたことだけに過ぎない」

「……」

「レオナルドが私達にまだ明かしたくないと思っているのなら、ゆっくりと待とうではないか。なに、すぐに我々の元にたどり着くさ――あの子は賢い子だ」

「『神々の義眼』、ですか。本当にあるのですな」

「その特異性と同じくらい有用性をはらむ人ならざるものの工芸品……だが、押し付けられた方はたまったものではないな。ミシェーラ嬢があの見えない目でレオナルドを必死に探していたのかと思うと、義眼をレオナルドが持ってしまったことも神の悪意としか思えなくなる」

さ、行こう。とクラウスはギルベルトを促して外へ出た。

レオナルドはおそらく退院の日時を自分達に誤魔化しているはずだ。

クラウスは別室でのレオナルドの薬物残留検査が行われている間に、小さなある機械をレオナルドの少ない持ち物のなかへと仕込んできた。

自分のスマートフォンと同じものをＧＰＳ発信モードにしてナップサックへと入れておいたのだ。

レオナルド側の発信信号を自分のスマートフォンに登録すると、これでいい、とクラウスは胸ポケットに再びしまい込む。

クラウスはそのままギルベルトの運転する車に乗り込むと、街灯が灯り始める道路を弾丸のごとく真っ直ぐに突っ切っていったのだった。

ロールスロイス・ファントムⅥの広い後部座席に身体を預け、クラウスはミシェーラとの会話を思い出していた。

ヘルサレムズ・ロットの外でミシェーラ・マクラクランになった彼女は、レオナルドを探してほしい、とクラウスに頼みこんできたのだ。

『こんなこと、クラウスさんに頼めることじゃないんですけど、兄が……兄が、あの街（ヘルサレムズ・ロット）で消息を絶ってしまったんです』

トビーとミシェーラの話では、彼らが結婚してからレオナルドは時々顔を見せるためにヘルサレムズ・ロット外の彼らの新居を訪れていたそうだ。

時折自分達が育ったヘルサレムズ・ロットの話にもなり、境界都市と呼ばれるもとニューヨークの対岸まで三人で赴き、色々と話をしていたのだという。その時もただミシェーラ達はドーム状の厚い雲にも見える霧に覆われた退廃都市を眺めているだけだった。

――だが、急に空にぴし、とひびが入ったのが見えた瞬間、ミシェーラとレオナルドの周りの時が一気に凍りついた。

空に走ったひび割れを拡げるように這い出てきたのは、眼球をいくつも自分の周りに侍らせ、まるで車のスピードメーターのような円形の幾何学的な模様をもった大きな一つ目をした異形の存在であった。

それは細い枯れ木のような指先をレオナルドに向け、もう片方の手に持った何かを自分に押し付けようとしていたのだ。

ミシェーラは咄嗟に自分の車椅子を押していた兄を、渾身の力で車輪を逆回転させ背後に突き飛ばした。そしてレオナルドに向けられていた指先を自分に受け入れたのだ。

そしてミシェーラは何者なのかもわからない存在に視力を奪われ、彼女の視界は暗闇に閉ざされた。あの時自分に押し付けられようとしていた何かは、ベッドのうえで苦しむレオナルドに与えられてしまったらしい。

そして夫のトビーに自分の目はどうなっているのかを聞くと、何度か問い詰めた後にようやく黒い義眼を嵌め込まれたようである、という答えを得た。目を覚ましたレオナルドの目は、その反対で真っ青な義眼であったらしい。

だが、今までと同じように見えているわけではなく、かと言ってミシェーラのように盲目になったわけでもないようだ。そう考えていたミシェーラだったが、レオナルドを見舞った夫から返ってきた答えにミシェーラは愕然とした。

レオナルドの義眼は、『見えすぎている』のだそうだ。

色々な映像がレオナルドの視界に手当たり次第入り込んで、頭を始終掻き回されているような感覚を覚えるとレオナルドはトビーに告げたそうだ。

一週間ベッドから起き上がれず嘔吐する兄の声に、ミシェーラは病室の外で泣くしかなく、自分がしたことは兄に更なる苦しみを負わせてしまったのではというミシェーラの悲しみを、夫のトビーは優しく労りながら、やがて月日が過ぎていった。

目を入れ替えられてから一ヶ月。ようやくレオナルドはマクラクラン邸からヘルサレムズ・ロットへ帰宅することを許された。病院でずっと缶詰になるよりはと視界以外は体調不良などないレオナルドの意向を汲み、トビーが自宅を静養場所としてくれたおかげである。

マクラクラン邸で静養している間のミシェーラは、努めて明るく振舞っていた。レオナルドが自分への罪悪感に激しく苛まれていることを薄々知っているのか、彼女もそれについては口に出すことはしなかった。

夫であるトビー・マクラクランもいつまでもいてくれていいとレオナルドに言ったが、それは出来ない、と首を横に振ったそうだ。

そうしてレオナルドは生まれ育ったＨＬに戻っていったのだが、その後すぐに彼の消息が途絶えたというわけである。

――それから間もなく、ミシェーラに高額の仕送りが届くようになった。

差出人はレオナルド・ウォッチであったが、ＨＬの銀行と外の銀行は情報不可侵条約を結んでおり、どこの支店から送られているのかなどという追跡情報は一切明かされないまま、毎月会社勤めでは負担になりそうなほどの高額が振り込まれた。

ミシェーラはヘルサレムズ・ロットでレオナルドが何か犯罪に手を染めているのかと不安になった。

が、トビーの伝手を辿って入手したＨＬの新聞や雑誌にはレオナルドの名前など載ってはおらず、では一体彼はどうやって生計を立てているのか気になった。

――そこで、ミシェーラは思い出した。

藁にも縋る思いでかつての良き保護者の電話番号をコールする。自分達の親代わりであったスティーブンとも考えたが、レオナルドに警戒されていることも考え、ＨＬにおいての顔の広さも考慮すると、クラウス・Ｖ・ラインヘルツしか思い浮かばなかったのだ。

クラウスの脳裏に不意にミシェーラの泣く姿がよぎる。

初めて見た彼女の苦悩する姿にひどく心が痛み、二つ返事でレオナルドの捜索を引き受けたものの、今はレオナルドのためにも彼女に連絡するのは避けるべきなのだろうか。

――と思っていた時分、クラウスのスマートフォンにＧＰＳの更新通知が届いた。それを見たクラウスは、やはり、と自分の考えが的中したことを悟る。ＧＰＳ信号はゆっくりとだが病院の座標から移動していた。

「――ギルベルト」

「はい、坊っちゃま」

「レオナルドが動いた。おそらく病院を無断で抜け出している。ここからはそう遠くないから、迎えに行きたいと思うのだが」

「かしこまりました」

ギルベルトはそう言うと、車に搭載されたカーナビゲーションシステムの画面を起動させ、レオナルドの信号を受信する。自分達が今いる通りのわずか三ブロック先にレオナルドのＧＰＳがあるらしい。今のところ動きは非常にゆっくりとしているから、車に乗ったりしているわけではなさそうだ。

ギルベルトはレオナルドの発信信号を横目で見つつ車を進めると、クラウスが座るスモークガラスの向こう側に、だぶついた服を着たレオナルドが歩いているのを視界の端でとらえた。

あの服はギルベルト自身がクラウスの命を受けてファストファッションの店で買い求めて来たものだったからだ。

レオナルドは自身の荷物の中に紛れ込んでいるスマートフォンには気づいて居ないようだ。

ギルベルトがクラウスに視線を送ると、クラウスは自らレオナルドに電話を掛けた。

レオナルドは人通りの途絶えた路地に急に鳴り響く電子音に驚き辺りを見回すが、どうやらクラウス達が近くにいることはまだ気づいていないようだ。

レオナルドは服のあらゆるポケットや自分の手荷物を大慌てで引っかき回すと、ようやくぶるぶると小刻みに震えながら甲高い音を出す、見知らぬ携帯端末を取り出して耳に当てた。

「――やあ、レオナルド」

「クラウス、さん？」

「息災かね？今のところ元気そうだが、恩人の顔に泥を塗るような真似はスティーブンが教えたのかね？」

「……っ」

レオナルドが息を呑む。迂闊な逃亡者はここでようやく自身がクラウスの掌の上にあったことを思い知ったらしい。

「話をしよう、レオナルド」
「話すことなんてありません。お金は必ず返しますから」
「金額の問題ではない。埒があかないな」
クラウスは道路脇に止めたロールスロイスから降り、ゆっくりと通りの向こう側にいるレオナルドに向かって歩いていく。
車通りも少なくはない大通りを悠然と横切って来るクラウスに、レオナルドは震えながらその巨体を見つめるしか出来ないでいた。
足は凍りついたように強張り、車のヘッドライトで逆光で真っ黒に塗りつぶされたようなクラウスの翠色の透き通る双眸だけがぎらりとレオナルドを射竦めた。
「――おいで、レオナルド。私達には時間が必要だ」
クラウスの長い手がレオナルドの腕を掴み、半ば引きずるように連れて行く。最初はレオナルドも力を足に込めて抵抗しようとしたが、クラウスの一瞥によってようやく諾々と従うようになった。
「手荒な真似はしたくはない。だからきみ自身で歩いてほしい」
「……もう、抵抗はしませんから」
その言葉の後は思いの外レオナルドは素直にクラウスに従った。
クラウスが手を離してもレオナルドはきちんと彼の後ろを歩いてきた。
もしかしたらこのまま逃げられるのかと危惧もしていただけに、半分拍子抜けしたのと、半分安堵の気持ちでクラウスはレオナルドの背中に手を回す。
「皆、きみのことを心配しているのだ。それだけはわかってほしい」
「クラウスさんもですか」
「もちろんだとも。そうでなければ探したりなどしない」
「――探していたのは、僕の眼じゃないんですか」
レオナルドはそう言うと、自分の細めていた眼を大きく開き、眼窩に埋もれた青く光る球体をクラウスの眼前に晒すと、クラウスの目に美しい金色の巻毛が垂れた『レオナルド』が現れた。
「――っにを、する！」
「やっぱりあなたは僕のことなんて見ちゃいない。僕を通して他の誰かを見ているのに、心配してるだなんてお為ごかしを言わないでくださいよ。いつもそうだった。いつも、いつも！あなたは僕じゃなくて僕の向こうに違う誰かを重ねてる！そんな奴のところに誰が戻るか！ちくしょう！」

クラウスは『レオナルド』の実体のない手が自分に絡みついてくるのを振り払う。だが、その幻はレオナルドの意のままにクラウスを取り囲むと、自分の心が創り上げた天使に往来で陥落させられそうになっていた。

「放してくれ、頼む……っ！」

だが、振り返るレオナルドはクラウスへ頭を下げると、きっぱりとこう言った。

「さようなら、ミスタ・クラウス。今までのご厚情、妹ともども感謝します」

「レオナルドっ……！」

レオナルドはそう言って幻の『レオナルド』に伸し掛かられ膝をついたクラウスに背を向け、走り出そうとした。

しかし路地裏から一本のしなやかな腕が彼の細い腕を掴み上げ、勢いに任せ背中に極められてしまう。

白手袋を着けたその腕は、包帯を全身に巻いた浅黒い肌のクラウスの執事であった。

「い、たっ……！」

「レオナルドさま、どうか坊っちゃまに掛けた幻術を解いてくださいませ。さもなくば、私はあなたの肩を抜かなくてはならなくなりますので」

あの細く枯れたような身体にこんな膂力が有ったなんて。レオナルドはクラウスの視界から幻覚を解き、そのままギルベルトの腕で拘束されクラウスの目の前に引きずられてきた。

「……僕の目が欲しいんでしょう？クラウスさん達は『ライブラ』だから。少しでもそういう人界に影響を及ぼしかねない事象は水際で潰す。そう聞いてます」

「だからといってきみの目を取り出すことなどない」

「でも僕は今、捕まる訳にはいかない！ミシェーラの為にも！――だから、見逃してはもらえませんか？僕は今、この変わった目を持つ以外なんの取り柄もないただの一般人です。あなたが目を見せるなというならそうします。ですから」

クラウスはギルベルトに向かって無言でファントムⅥの方へ顎でしゃくってみせる。ギルベルトも軽く頷くと、レオナルドをそのまま停めてあるロールスロイスまで軽々と引きずっていった。

レオナルドの懇願も空しく、クラウスはギルベルトと二人がかりで後部座席にレオナルドを押し込むと、積んであったダクトテープで手足をそれぞれをぐるぐる巻きにして、口にもテープを貼り付けた。

傍目から見れば即通報ものの事象である。

だがここはヘルサレムズ・ロットだ。

誘拐まがいの出来事など見ていなければ誰も通報しない。

クラウスはこの時ほどここがヘルサレムズ・ロットで良かった、と胸を撫で下ろし、ギルベルトに自宅へ車を走らせるよう言うと、冴え渡る青い目を開いてなおも抵抗しようとするレオナルドの首の後ろに軽く手刀をあて気絶させた。

ようやく訪れた夜の静けさの中を三人乗る車が切り裂くように走り過ぎていく。その様は亡霊という名を冠する車に相応しくもあり、音もなく加速していく車に誰も気付くものは居なかった。

ヘルサレムズ・ロットにおけるクラウスの邸宅は、貴族階級の人間が住むにはひどくこじんまりとしたところにあった。

使用人がいる気配もなく、空き部屋もそう多くはないようだ。ビルのフロアを改装したような簡素な作りになっているのだが、クラウスは部屋を開けると小脇に抱えていたレオナルドをベッドの上に放り投げた。

二三度バウンドしてから気がついたレオナルドは、きっとクラウスを睨めつける。だが、クラウスはそれもどこ吹く風であった。ギルベルトに退室を命じると、鍵を扉に掛け、レオナルドの口に貼り付けたテープを一気に剥がした。

ぷは、と水面から顔を上げたような呼吸をして、レオナルドは新鮮な空気を肺いっぱいに吸い込むと、小さく這いずるような声でクラウスに食って掛かる。

「……この、クソ野郎！」

「何とでも。きみの保護は私にとって急務だったのでね」

「外せ、よ！この！」

「きみはこれから私とともにしばらくの間暮らしてもらうことにする。なに、ここには私とギルベルトしか居ないからゆっくりと寛ぎたまえ」

そう言うとクラウスはレオナルドの手足を拘束するダクトテープをいとも容易く引き千切っていく。それを見たレオナルドは背筋をぶるりと震わせると、ベッドの脇へ腰掛けるクラウスから距離を取った。

「昔はあんなに甘えてくれたのに、ひどいな」

「どっちがですか。俺はあなたの方が酷いと思いますよ」

「どうしてかね？」

「俺の働き口を潰したじゃないですか」

「――身体も使わず幻術で稼いでいたのに？」

「金を稼ぐにはしょうがないことですよ。それに、目は他のことには使っていない。あくまで俺の身の安全を守ることだけに絞ってたし、身体を張らなかったわけじゃない！」

クラウスはそれとなくカマをかけてみたが、レオナルドは気づかずに乗ってきた。レオナルドに言った事はあくまでクラウス自身が推測したものだったが、当たっているとは正直思わなかった。しかしそれ以外の事には使っていない、という。レオナルドの性格を思い返してみると納得できる答えだろうと思えた。

「なぜそんなにミシェーラ嬢に高額の仕送りをするのかね？彼女はもうマクラクラン氏というパートナーがいる。彼は事業家としても高い手腕の持ち主であるし、それを抜きにしても名家の出だ。盲目になった妻一人、然るべき介護の人員をつけられない人物だとは思えないがね」

「……確かにミシェーラは結婚してますけど。でもそうじゃない。そういうもんじゃないんですよ、家族って」

「なるほど」

「それにあなたは知らないだけだ。ミシェーラが俺を庇ってどんな気持ちでいるかなんて……そこに居ないあんたが、知ったふうな口を聞くな！」

レオナルドは自身の溜まった鬱憤をクラウスに叩きつけるかのように荒々しい言葉で彼を詰った。実際、クラウスが自分の前に再び現れてからどうしようもない運命の奔流に弄ばれている気がしてならない。

クラウスが現れなければ、いつものように男相手に媚びを売って金を稼ぐ、ミシェーラの為の日々が淡々と続いていくはずだった、のに。

「ならどうして欲しいのかね？金もなく職もなく、家もないきみをこの寒空の中に放り出すことなど私には容易い。しかしきみの意見を尊重したいと思っている。きみが満足できる答えというのは、きみ自身持っているのかね」

「……最低な人ですね、そうやって脅して」

「脅しじゃない。これは交渉だ。私は私に切れるカードを今きみに見せている状態だよ、レオナルド」

ぐっとレオナルドは唇を噛んで嗚咽を堪えた。

――確かに今の自分には全くの後ろ盾も先立つものもない。

『外』よりはいつも人員不足で飛び込みでも働きやすいＨＬだったとしても、ミシェーラへの仕送りまで届くはずもない。それこそクラウスの言うとおり、あの自分よりも歳上の義弟に任せた方が彼女にとってもいいはずだ、と、心の中ではそう思っているのも事実だ。

しかし、レオナルドの心を妹の視力を奪ってしまったという事実がいつも胸を締め付ける。

――わかっているのだ、そんなことは。正論過ぎて何も言えないし、自分がやっている事はただの自己満足であることなど。